



ロバート・ヘンリソン作 『イソップ寓話集』 その 一 (Robert Henryson, The Fable 1)

著者	西納 春雄, 安藤 光史
雑誌名	言語文化
巻	3
号	4
ページ	649-674
発行年	2001-03-10
権利	同志社大学言語文化学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000004355

ロバート・ヘンリスン作 『イソップ寓話集』その一

西 納 春 雄 訳
安 藤 光 史

以下の翻訳は、ロバート・ヘンリスン作、『イソップ寓話集』(*The Morall Fabillis of Esope the Phrygian*) の序歌と、それに続く3編の物語である。これは訳者たちがこれまで試みてきたヘンリスンの作品の一連の翻訳『クレセイドの遺言』『オルフェウスとエウリディケ』『短詩集』に続くものであり、『イソップ寓話集』翻訳完成の暁には、ヘンリスンの全作品の翻訳が完成することになる。

イソップ物語は、紀元前六世紀頃に生きたとされる古代ギリシアのフリュギア人アイソポス (Aisôpos) の作になると伝えられる寓話物語群であり、前三世紀ごろ散文で編集され、以後次々に増補された。寓話は教訓を目的とした短い物語で、おもに擬人化された動物が活躍する。古代ギリシアではヘシオドス、アルキロコスを経て、イソップが道徳的、風刺的テーマをもつ物語として寓話を確立したとされる。

ヨーロッパ中世において、イソップ物語は、登場する動物を借りて処世訓を語る寓話として、人気があった。フランス中世には『イゾペ (小イソップ) 集』があり、なかでも12世紀にマリー・ド・フランスが著した、封建社会を批判する103篇の寓話は注目に値する。また、イソップに起源を持つとも言われ、狐のルナールが活躍する風刺動物譚『狐物語』も12世紀頃から広く流布した。フランス近世には、ラ・フォンテーヌ (1621-1695) が、伝統的テーマに詩と哲学的議論と英知を盛込んで、寓話を偉大な詩のジャンルにまで高めた。イギリス中世においては、ヘンリスンが師と仰ぐチョーサーにも、

『女子修道院長の話』の中に狐物語の伝統を引く挿話が存在し、同時代のリドゲイト（1370?-1450?）にもイソップ物語の翻訳がある。中世の教会で説教に引用されることも多く、教科書としての役割と相まって広く親しまれた。イエズス会が教化に用いていたイソップ寓話集が、宣教師と通じて早くから日本にも紹介されて、1593年（文禄二）に九州天草から邦訳『伊曾保物語』が刊行された。

イソップに帰される寓話は現在数百編にのぼるが、これらと比べるとヘンリスンの寓話は「序歌」(Prologue)とそれに続く13編の寓話によって成り立つ424連2975行の小規模な物語集である。しかし、寡作のヘンリスンの作品中にあっては、一番の大作であり、かつその完成度の点でも、『クレセイドの遺言』(*The Testament of Cresseid*)と並ぶ彼の代表作と言ってよい。用いられている基本的な詩形は、弱強詩脚、ababbcc と押韻する7行を1連とする、いわゆるライム・ロイヤルであり、これは、『クレセイドの遺言』や『オルフェウスとエウリディケ』(*Orpheus and Eurydice*)などの作品においても基調をなす詩形として採用されている。訳出に際しては、これまでの作品と同様に、平易な口語散文訳を心がけた。翻訳の底本として用いたのは、これまでと同様、Denton Fox の編纂した、*The Works of Robert Henryson* (Oxford: Clarendon Press, 1981) である。

序歌

古い詩に歌われた寓話のすべてが
 真実にもとづいているとは言えないが、
 洗練された言葉は、巧みな言い回しに乗って、
 人の耳に心地よく響くものだ。
 そして寓話がどうして書き始められたかというならば、
 それは、他の事物に姿を借りて、
 人の誤った生き方をたしなめるためだった。

荒れた土地でも

精魂込めて耕せば、
 花や穀物が芽吹き、 10
 人の滋養となる豊かな実りが結ばれる。
 ちょうどそのように、詩の巧みな言い回しからは、
 それを良き目的のために役立てようとする人には
 すぐれた道德の教えが生まれ出ずるものなのだ。

胡桃くるみの殻はとても固いが、 15
 その中には食べて美味しい実が隠れている。
 ちょうどそのように、寓話の奥には、
 賢くてためになる教えの実がぎっしりと詰まっているのだ。
 そして学者たちは言っている、真剣な話題の中に
 愉快的話題を入れることがとても大切だということを。 20
 それは、気分が軽快になり、事がすばやく運ぶからだ。

というのも、ご存知のように、弦つるを張ったままの弓は、
 反り固まってしまい、弓の力も失せてしまう。
 ちょうどそのように、常に一心不乱に
 深刻な話題や学問に没頭する心も、また同様。 25
 真面目な話に愉快的話題を少し混ぜるのが良策。
 かのイソップも、たしかこのように言っている、
 「深刻な事態も、ユーモアをもてば扱いやすし」と。

皆様、このたびこの詩に関しましては、
 どうか誤りがあれば訂正を請い願って、 30
 ラテン語から母なる国語へと、
 翻訳のまねごとなど試みたいと思います。
 これは何も私のいたずらな自惚れからするのではなく、
 さるやんごとなきお方の求めと命によるもの。
 そのお方のお名前は、今ご披露するには及びませぬ。 35

素朴な言葉と粗野な言い回しで、
 私は書かねばなりません。雄弁の術も
 修辞の学もわきまえておりませぬゆえ。
 そこで、私は謹んで皆様方をお願いいたします、
 もしも私に、不注意から 40
 何か不備、冗漫な点がございましたら、
 どうかご随意にご訂正くださいませ。

わが著者イソップは、その寓話の中で、
 いかに獣が話し、理解したか、
 またいかにうまく討論、質疑し、 45
 三段論法を展開して、結論を下したかを語っている。
 そして、実例と譬え話を用いて、
 いかに多くの人間たちが、その振る舞いと
 様において、獣に似ているかを論じている。

人が獣に似ているとて、驚くことはない。 50
 汚れた肉の快樂を欲し、
 羞恥心とて自制する力にもならず、
 あらゆる欲望をほしいままにする輩には、
 日頃の癖と習慣から
 そのような性癖がやがて心にしっかり根付いて、 55
 すっかり獣に変わってしまうのだ。

今申し上げた、この立派な学者イソップは、
 軽快な韻律と、すばらしい雄弁を用いて、
 譬え話でその詩を書いた。というのも、彼は
 身分の高い人も低い人も ^{さげす}蔑むつもりはなかったからだ。 60
 第一番に書いたのは、雄鶏の話。

この鶏は、餌を探し求めるうちに、宝石を見つけたという。
さて、雄鶏の寓話をまずはお聴きください。

雄鶏と碧玉の話

ある時、輝くように立派な雄鶏がいた。
貧しかったが、威勢がよくて、大胆だった。 65
彼は夜明けに、元気に羽ばたいて肥やしの山に降り立った。
朝のごちそうにあずかろうというのがその目的だった。
彼は、ごみの中を引っかき回しているうちに偶然に、
たいそう高価で美しい碧玉を見つけた。
それは家の中から掃き出されたものだった。 70

勝手気ままで小生意気な娘たちは、
遊びが好きで、町で人目を引くのが大好きだが、
家の掃除は大嫌い。床がきれいに
なりさえすれば、それでよし。
何があろうとお構いなし。宝石が床に落ち 75
掃き出されてしまうこともよくあること。
この宝石も、かくして、掃き出されたものに相違ない。

宝石を見つけてびっくりした雄鶏は言った、
「おや、高価で高貴な碧玉君、せっかく
君を見つけはしたが、僕には一向に得にはならないな。 80
君は王侯貴族の持ち物だからね。
君がこんな境遇にあるとはまことに遺憾、
このように糞と泥とにまみれ、埋もれているとは。
かくも美しく、金にも匹敵する価値がある君なのに。」

「君を見つけたのが僕であったのはまことに残念。 85
 というのも、君のたいそうな値打ちも、美しい輝きも、
 この僕には称賛することができないからね。
 君を見つけたって、僕はちっともうれしくない。
 王侯貴族は君をたいそう愛^めでるかもしれないが、
 僕は空っぽのおなかを満たしてくれる台所の残飯や 90
 穀粒のような、ずっと値打ちの劣るものが好きさ。」

「だから僕はごみためを爪でひっかいたとき、
 命の糧になるものが出てきてくれた方がよかったと思うよ。
 穀粒でも、虫けらでも、^{なめくじ}蛞蝓でも
 どんな食べ物のかけらでも、おなかの足しになるけれども、 95
 どんなにたくさんの宝石が出てきても仕方がないよ。
 君の方だって同じことだろう。
 僕なんて何の役にも立たないと軽蔑していることだろうさ。」

「君は僕の必要とする小麦を一粒も持ってやしない。
 君の美しい色は目に慰めを与えるだけで、 100
 この胃袋をふくらます役には立たない。
 ご婦人方が言うとおり、『見せる仕事は楽なもの』さ。
 手に入るものなら、少し餌にありつきたい。
 腹を空かせた者は、見栄では生きていけない。
 ひからびたパンがあれば、料理人など必要ないさ。」 105

「一体どこが君の^{すみか}栖となるべきだろうか？
 君は王城の塔以外のどこに住めるだろうか？
 威風堂々と誉れを受ける王の冠でなくして
 一体どこに安住できるだろうか？
 宝石の華たる君、さあ、立ちなさい、 110
 この肥やしの地を去って、本来あるべき所に行きなさい。」

僕は君の役には立たないし、君も僕の役には立たないからね。」

雄鶏は、この宝石を地面に置いたまま
餌を探しに行ってしまった。

この宝石が、いつ、誰に、

115

いかようにして発見されたかは、

ここでは論じないことにしよう。

だが、この寓話に隠された教訓と意図については、

粗末でつたない詩の形でお話しすることにしよう。

教訓

この美しい碧玉には、七つの特性があった。

120

まず一つに、その色は摩訶不思議、

炎のように赤いかと思えば、空のように青い。

それは人を強くし、勝利に導く。

また、人を危険より守ってくれる。

この石を持つ者は誰でも繁栄に恵まれ、

125

火も運命の転落もおそれる必要はない。

このすばらしい碧玉は、特別の色合いで、

完全無欠の深慮と学識の^{しるし}徴となり、

それには地上のどのようなものよりもすぐれた

^{あまた}数多の徳の力が備わっている。

130

誉れある人を栄えさせ、幸福にし、

そしてあらゆる悪徳と信仰の敵に

うち勝つよう、人を強くするのだ。

いったい誰が勇敢で豊かで幸運たりえようか？

いったい誰が危険や不運を避け得ようか？ 135

いったい誰が国家や町や家を治め得ようか？

学問がなくては、すべて叶^{かな}わぬ。断じて。

学問こそは衣魚^{しみ}や湿気や錆にも損なわれずに
永遠に変わらぬ富である。

それは人の魂の永遠の糧となる。 140

碧玉よりも麦粒ごときを求めた

この雄鶏は、愚者と同列だ。

学問を心底軽蔑し、

善を知らない。また学ぶ気さえない。

賢明な議論を聞けば、気分が悪くなると言う。 145

人がわざと残飯桶に放り込んだ宝石を

見つけたときの雌豚と全く変わるところはない。

いったい誰が学問と学識を憎むことがあろう。

かくも貴き、かくも価値ある、

かくも貴重なものを、そして地上の富を積んでも 150

購えないものを全く理解し得ないのは、愚者だけだ。

学識を得ようと、全生涯を研究に捧げることの

できる人こそ幸福なり。その人にとって

それ以上大切なものはないのだから。

しかし、ああ、この碧玉は失われた。 155

我々はそれを探さない。また、見つけようと努力もしない。

富さえ手に入れば、人はよりよい生活を求めようとはしないもの、

たとえ魂が学問を知らず、学問に欠けていても。

このことを語っても、唇さみしいだけ。

だから、もう止めよう。もう言うまい。 160

われと思わんものは、行って探しなさい。碧玉はあそこにあったのだから。

二匹の鼠

我が著者なるイソップは、二匹の鼠のことを書いている

二人は仲のよい姉妹であった。

姉の方は、ある自治都市に暮らしていた。

妹の方は、そのすぐ近くの田舎に住んでいた。

165

時には藪や茨の下で、時には小麦の畑の中で、

人に害を与えながらひとりで暮らしていた。ちょうど

ならず者があちこち荒らし回って窃盗^{ぬすみ}で生きて行くように。

この田舎の鼠は、冬の季節になると、

飢えと寒さにたいそう苦しめられた。

170

一方、町に住んでいた鼠は、

ギルドの会員で、特権を有する自由市民となっていた。

税金も関税も一切支払わず、

彼女の好きなチーズや粗挽き小麦粉の

箱や櫃の間を自由に歩き回っていた。

175

ある時、たらふく食べていい気分になった彼女は、

ふと田舎にいる妹のことを思いだした。

そして彼女の暮らしを知りたい、

森の中でどんな暮らしているのかを見たいと思った。

そこで、素足でたった一人、尖った石突きのついた杖を頼りに、

180

本物の巡礼のように、町を抜け出て

丘を越え、谷を渡って、彼女の妹を捜しに出かけた。

荒野の道を彼女は歩き続けた。

沼地や荒地や土手を通り、茨の茂みをくぐり抜けて

彼女は畑地を越えて、^{うね}畝に至るたびに大声で叫んだ、185
 「さあ、出ておいで、私の大事な妹！
 チュウとひとこえ鳴いておくれ。」身内のものなら
 声ですぐ相手がわかるもの、妹鼠はそれを聞いて、
 姉の声と知り、さっそく姿を現した。

この姉妹が再会したときの190
 大いなる喜びと互いへの情愛ときたら！
 皆さんにも見せてあげたかった。
 二人は笑ったり、うれし泣きしたり、
 優しく接吻したり、抱き合ったりした。
 そうして、やがてようやく興奮から醒めて、195
 二人は並んで住处へ入っていった。

聞いていたように、それは粗末な部屋だった。
 苔と羊歯^{たぐ}の葉の安普請。
 地面に埋まった石陰の、まことの苦屋。
 入り口は、高くもなければ、広くもない。200
 そこを通過して二匹はさっそく入っていった。
 こそ泥連は、明かりを嫌うもの。
 部屋には火の気もなく、明かりをとる^{キャンドル}蠟燭とてない。

こうして質素な中に鼠たちが部屋に落ち着くと、
 妹鼠は、急いで食料置き場から、205
 香料ではなく、胡桃と豆を持ってきた。
 これがごちそうだったかどうかは、別途考えていただくことにして
 都会の鼠は、威張って、いきなりこう言った、
 「ねえ、これがあんたの日々の糧ってわけ？」
 「そうよ」と妹、「これがおいしくないって言うの？」210

「だめ。あんまり。こんなの侮辱だわ。」

「お姉さん、それはあなたが間違ってるわ。」

お母さんは、私たちが生まれたとき、

私とお姉さんは同じお腹にいたとおっしゃった。

私はお母さんとお父さんの生き方と習慣^{ならい}を受け継いで、

貧乏暮らしを守ってます。だって、

私たちには土地の財産なんてほんとなかったんですもの。」

215

「ねえ、お前さん、せっかくだけど

こんな粗末な食事には我慢できないわ。

私は領主様並の生活をしているから、

私のおなかは軟らかい肉にしか慣れていないの。

こんな枝豆や胡桃は、かみ砕く前に

私の歯の方が折れてしまう。柔らかい肉だけ食べている

この体はやせ細ってしまうわ。」

220

田舎の鼠は言った、「まあまあ、お姉さんたら、

もしよかったらお姉さんの前に今あるもの、

食事も飲み物も、この隠れ家だって、

みんなあなたにあげてよ。もしずうっとここにいてくださるならね。

そうすれば、愉快地楽しく、うきうき暮らせることでしょう。

そうなれば、粗末な食事も親しい同士と一緒に食べて、

とても柔らかくておいしく感じることでしょう。」

225

230

「どんなごちそうだって、しかめ面をして出されたら、

いったいどんな楽しみがあるでしょう。

朗らかな顔は丸一頭の牛料理よりも

お客の心を愉快にしてくれます。

慎ましい量の食べ物でも、食卓で給仕してくれる人が

真心込めてくれるなら、それは仏頂面で出される

235

香料入りのごちそうにまさります。」

こう言って妹が元気づけたのだが、
この都会の鼠は、いっこうに気が晴れなかった。 240

浮かぬ顔で、妹が次々と出してくる
ごちそうを、眉をしかめて眺めていた。
やがて口を開いて、半ば冗談に言った、
「妹や、あんたが王侯貴族の馳走というこの食事は
あんたみたいな田舎者には十分満足がいくかもしれないね。」 245

「ひとつこの穴を出て、私の家に来なさいよ。
じっくり見て、体験してよ、
私の聖金曜日の方があんたの復活祭よりもすばらしいことを。
私んところの皿の残りものは、あんたのところの食費全部にあたるのよ。
私の家は、新しくって、とても安全。 250
猫や落とし穴や、鼠の心配ご無用よ。」
「わかったわ」と妹はこたえて、二匹はそろって出発した。

二匹の鼠は一所懸命草や小麦をかき分けて、
物陰に隠れ、姿を隠して進んで行った。
姉が先立ち案内し、妹鼠は後ろから 255
ぴったりついて進んで行った。
夜ひた走り、昼は寝て。
こうして明け方早く、^{ひばり}雲雀の歌い出す前に
二匹はたどり着き、意気揚々と町に入る。

そこから遠くない所、一軒の立派なお屋敷へと 260
姉と妹は到着した。そここそまさに目的地。
挨拶などはそっちのけ、二匹はあっという間に落ちて着いた、
食料品をぎっしり蓄えた貯蔵庫の中に。

棚にはチーズとバターがうずたかく。

肉も魚も山とあり、新鮮塩引き食べ放題。

265

小麦、小麦粉、麦芽も袋にどっさり。

さて、空腹を覚えると、食前のお祈りは端折って、

手を洗い、さっそく食事に取りかかった。

それは料理人が腕を振ったフルコース。

大ぶりに切った羊肉^{マトン}に牛肉、

270

それは領主の饗応^{もてなし}をすっかりまねた宴会だった。

ただ一つだけ違っていたのは、葡萄酒^{ワイン}の代わりにお冷やを飲んだこと。

それでも彼女らはすっかり満足しきっていた。

愉快地冗談を飛ばし、

上機嫌の顔つきで、姉は妹に言った。

275

この部屋がああ惨めな穴蔵と異なることが

しっかと得心できたかと。

妹は言った、「ええ、お姉さん。でも、これはいつまで続くのですか」

「すうっと、永遠に続くに違いないね。」

「もしそうならば、本当に安心ね。」

280

さらに気分を盛り上げようと、姉が持ち出したのは、

小麦の皿と小麦粉一鉢、

そしてパン種なしの

平焼きケーキもたっぷりと。

さらにゼリーの代わりに、極上の白パン。

285

加えて白蠟燭を箱の中からくすねてきた。

これは香料代わりの口直し。

こうして二匹はとことん楽しい時を過ごし、

「万歳、お祭り^{ユール}、万歳」と声高に叫んだ。

しかし、とかく喜びの後には苦労が、290
繁栄の後には困窮が訪れるのが世の習い。
このように彼女らが浮かれて騒いでいる間に、
鍵を手にした給仕がやってきて、
ドアを開けると、食事中の二匹を見つけたのだった。

私が思うに、彼女らは、手を洗う暇などあるものか、295
だっと駆け出し、われ先にと逃げたのだった。
都会の鼠は穴を持ち、そこにさっと駆け込んだ。
妹鼠には隠れるべき穴などない。
このうぶな鼠の様子は見るも哀れ。
見捨てられ、万策尽きて、恐怖のあまり300
気を失って、仮死状態

しかし、神の思し召しか、幸運なことに、
召使いは彼女らを捜して追いかけ
追い払う^{ひま}時間がなく、
ドアを開けたままで行ってしまった。305
大胆な都会の鼠は召使いの去るのを十分に見届け、
自分の穴から出てきて、声高に叫んだ、
「妹よ、大丈夫かい。とにかくその場でチュウとお鳴き。」

この田舎の鼠は床にべったり倒れていた。
そしてひたすらに、もう死ぬのではないかと恐れていた。310
彼女の心臓は何度も激痛に襲われ、
手と足は熱病に冒されたようにぶるぶるふるえていた。
姉鼠は、妹がそんな有様で見ると、
あまりに気の毒で、おいおいと泣き出してしまった。
気を取り直して、蜜のように甘い言葉で慰めた。315

「なぜ倒れているの、かわいい妹、起きなさい。
 さあ、食事をとりましょ。もう危険は去ったわ。」
 妹は沈んだ気持ちでこたえた、
 「とても食べられないわ、もう怖くて怖くて。
 こんな思いをするくらいなら、^{レソト}四旬節のお精進に、 320
 肉なしスープで、そら豆やエンドウ豆をかじっている方がよほどましだわ。
 不安と恐怖の中での、お姉さんの宴会よりも。」

しかし、姉鼠の懇願に、妹鼠はようやく起きあがり、宴会に戻って、席に座った。

彼女らが水を一口か二口飲むか飲まないうちに、
 あの陽気な雄猫、ギップ・^{ハント}捕り物名入が 325
 ひょっこり現れ、「こいつあ、しめた。」
 それを聞くなり、都会の鼠は、電光石火、自分の穴に飛び込んだ。
 この猫はもう一匹の鼠の背中を捕まえた。
 右手で、左手で、右へ左へ、上から下へと、この猫は、

陽気な子羊のように 330
 妹鼠をもてあそぶ。
 藁の下へ逃げ込ませては、
 ちょっと目を閉じ、隠れん坊で遊ぶのだ。
 こうして哀れな鼠をさんざんいたぶった。
 やがてそのうち、全く幸運なことに、 335
 妹鼠は壁掛けと壁との間に這い込んだ。

そして大急ぎで、壁掛けの裏を必死に駆けのぼり、
 猫の手の届かぬよう、高くよじ登って、
 爪を使ってうまくぶら下がった。
 やっと猫が立ち去ると、ようやく元気を取り戻した。 340
 邪魔者がいなくなったのを見届けて、

そこから飛び降りると、都会の鼠に大声で行った、
「さよなら、姉さん。こんなごちそう、もうまっぴら！」

「お姉さんの宴会は心配事だらけ。

鷲鳥の肉は上等でも、ソースは胆汁の苦い味。 345

特別コースのごちそうも散々だったわ。

お姉さんも、そのうちここで身を滅ぼすわ。

壁掛けと仕切りさんには、ほんとうにありがとう。

あの残酷な獣から私を守ってくれて。

神様、どうか私をこんなご馳走から遠ざけてくださいませ。」 350

「田舎に戻ったら、もう二度と

こんな所にくるものですか。」

そう言い終わると、妹は、いとまを告げて、出発した。

小麦畑や平地を通り、

町を離れると、気分は爽快。 355

大喜びで荒れ地の方へ向かって行った。

その後この妹鼠の消息については、私は知らない。

しかしながら、聞くところによれば、彼女は無事自分の巣穴にたどり着いたそうよ。

そこは、大きくはないが、羊毛のように暖かく、

上の間も下の間もすてきな蓄え、 360

エンドウ豆、胡桃、ソラ豆、烏麦、それに小麦でぎっしりだった。

静かで安心、不安なこと一つもなく、

ほしいときにはいつでも十分に食べられた。

そして、姉のご馳走には、もう二度と出掛けようとは思わなかった。

教訓

さて、皆様方、ご注意くださいれば、この寓話には
一つ教訓があるのがおわかりのはず。 365

ヤハズ豆が立派な豆に混じっているように、
この世の歡びには不幸が混じる。
だからいかような身分にあっても、
心配と苦勞はつきまとう。 370
特に、いと高き身分に昇りつめ、
少しの財産では満足できない方々には。

恐怖のない簡素な生活に幸いあれ。
平穩の中の質素な生活に幸いあれ。
たとえ量こそ少なくとも、 375
事足りるならば、それでよし。
過ぎた富裕と、盲目の繁榮は
不幸な結果を招くもの。
それ故に、この世でもっともすぐれた生き方とは、
少しを所有し、平穩に過ごすことなのだ。 380

胃袋を満たすことに慣れて、
それを神と尊ぶ欲深き人間よ、
自分自身に注意せよと、私は言うておく。
必ずや猫がやって来て、鼠に目をつけるのだ。
いつもおびえて、おどおどしているならば、 385
ご馳走も、高貴な身分も、何の値打ちがあるうか。
それ故に、私は言う、この世で最良のもの、
それは僅かを所有し、満足して暮らすことなのだ。

皆様方、たとえ小さな燃えさしでも
 体を温めてくれる自分の火は黄金の値打ち。 390
 聖書を読めばおわかりだろうが、ソロモンも言っている、
 「天が下に最上なるものは、
 つねに正直にして、楽しく愉快に過ごすこと」と。
 それ故に、次の言葉で締め括りたい。
 この世の喜びとしてまさるものなきは、 395
 僅かを手に、心に平安を持つことなり。

雄鶏と狐の話

獣というものには理性がない、
 すなわち、思慮分別に欠けているが、
 それぞれの種類ごとに持って生まれた
 様々な性質を備えている。 400
 熊は力が強く、
 狼や獅子は猛々しく、
 犬は夜吠え、家を守るといった具合。

獣の性質はあまりにも多様で、
 人にはとうてい知り尽くせるものではなく、 405
 種類において実に変化に富むので、
 私の知識ではそのすべてを書き記すことはとうていできない。
 そこでここでは、私がこの近年の間に
 見聞きした例を紹介しようと思う。
 それは一匹の狐と立派な雄鶏の間に起こったことだった。 410

その頃、とある村に一人の寡婦やもめが住んでいた。

彼女は糸巻き竿で糸を紡いで生計を立てていた。
 そして、寓話にあるように、彼女の財産といえば、
 ひと群の雌鶏と、それを守るための
 一羽の雄鶏だけだった。この雄鶏は、
 たいそう元気がよく、この寡婦のために
 いつも鳴いては夜明けを知らせるのだった。

415

この寡婦の家からほど遠からぬところに
 人を寄せつけないほど茂った茨の茂みがあり、
 その中にずる賢くて狡猾な
 狐が一匹棲んでいた。
 この狐は昼な夜なに雌鶏を盗んで
 その寡婦に大変な乱暴狼藉を働いていたが、
 彼女はこの狐に仕返しする術を持たなかった。

420

このずる賢い狐は、雲雀がさえざり始めると、
 ひもじさに耐えかねて村へ向かった。
 そこでは夜も明けきらないのに雄鶏が
 夜に飽きてねぐらから飛び降りていた。
 狐のロレンス君はこれを見ると、いったいどんな方法で
 この雄鶏をだませるか
 あれこれ考え、策略を練った。

425

430

しらばっくれた顔つきで
ひざまず
 跪き、素知らぬ顔で狐は言った、
 「おはよう、ご主人様、立派なチャンテクレールさん。」
 これに驚いた雄鶏は、後ずさりした。
 「いえ、怖がることはありません。
 驚いたり逃げたりすることはありません。
 私はあなたにご奉仕しようここに来たのですから。」

435

「もしも私が、かつてあなたのご先祖様にしたように、
 あなたに奉仕しないとしたら、それは私の咎。 440
 あなたのお父様は、いつも私の胃袋を満たしてくれましたし、
 積み肥から荒野に食べ物を送って下さいました。
 臨終のお父様を、私は一生懸命に看病し、
 頭を抱いて、暖かい飲み物を差し上げました。
 あの優しいお方は、私の腕の中で息を引き取られたのです。 445

「私の父を知っているのか？」と雄鶏は答え、高笑いした。
 「そうですとも、まこと、あの方が樺の木の下で
 息を引き取られる時には、私はその頭を抱いてあげました。
 そして、なくなられた時には、埋葬のミサを唱えました。
 ですから、私たち二人の間にはどうして敵意などありません。 450
 お父様にあれほど奉仕した私以外に、いったい誰が
 あなたの^{しもべ}下僕として信頼できるでしょうか。」

「私は、あなたの美しく見事な羽根毛と
^{くちばし}嘴と、立派な胸と、^{とさか}頸毛と鶏冠を見ると、
 本当に、神様に誓って、この心が熱くなり、 455
 本当に親しい気持ちになります。
 あなたにお仕えするためなら、^{つくば}這い蹲りましょう、
 たとえ霜や雪の中、雨降る天気の中でも。
 そして私の灰色の毛皮をあなたの足下に敷きましょう。

この狡猾で不正直な者、嘘つき狐は、 460
 雄鶏に一つだけ、けちをつけた。
 「私が思うに、あなた様はお父上のご様子と比べると
 だいぶ異なり、欠点が見えます。
 時を告げる声では、お父上の方が上手でした。

だって、お父上はいつも爪先で立って鳴かれたのですから。 465
嘘じゃありません、すぐ側でこの目で見てたんですから。」

それを聞いた雄鶏は、高くつま先立って
嘴を掲げ、力を振り絞って歌った。
ロレンス君は言う、「ご立派、さすがだ。
間違いなく、お父上のご子息だ。 470
でも、あの方の技巧うまさには、まだ足りないところがありますよ。
というのは、お父上は、鳴くときには、
瞼まぶたをしっかりと閉じてからだ 軀を三度くるくる回したのですから。」

自惚れと虚栄心は、多くの人々に破滅をもたらす。
この雄鶏もまさにその通り、 475
大いなる尊敬を勝ち得ようと、
不用心にも、両眼を閉じて、二、三步走り、
歌う仕度を整えた。
一声高らかに鳴いたその途端、
待ち構えていた狐は彼の首をしっかりとくわえた。 480

狐は雄鶏を捕えると、一目散、森へ走った。
自分の仕業をとがめられることなど恐れもせずに。
それを見た雌鶏たち、パードック、スプルートック、コポックが大声で叫ぶ
と、
寡婦はわめきながら家から走り出てきた。
彼女はこの様を見て、息をのみ、叫んだ、 485
「何てこと、人殺し、ぬすっと 盗人！」と大音声。
「ああ、大事なチャンテクレールが盗られたわ！」

気がふれたように何度も何度も、金切り声やら叫ぶやら、
髪の毛をかきむしり、胸を叩いた。

そして、顔は青ざめ、茫然自失、490
 悲しみのあまり、気を失い、冷汗をかいて卒倒した。
 それを見ると、雌鶏たちは、餌をついばむのを止めて、
 彼女が気絶している間に、
 この事件について議論した。

「ああ」とパートックはたいそう悲しみ、495
 頬に涙をぼろぼろ流しながら言った。
 「あの方は、私たちの愛しいお方、昼間の恋人、
ナイチンゲール
 小夜鳴鳥、時を告げる鐘だった。
 夜寝ずの番をしてくれて、私たちに危険を知らせてくれた。
 そして、灰色のスカーフをかぶった曙のオーロラの女神が500
 夜と昼との間に頭をもたげる時を知らせてくれた。」

「これからは、いったい誰が私たちの愛人となって、私たちを導いてくれるのかしら。
 私たちが悲しいときに、いったい誰が歌を歌ってくれるのでしょうか。
 あの優しい嘴で、あの方はいつもパンを砕いてくださった。
 この世の中であの方ほど親切な方がいたかしら。505
 愛の秘め事では、あの方は、自然から与えられた力を振り絞って
 いつでも私たちを歡ばせてくださった。
 あの方が亡くなって、私たちはどう生きたらよいのでしょうか。」

すると、スブルートックが言った、「およしよ、姉さん、悲しむのは、
 どうかしたんじゃないの、あの人のことでそんなに嘆くなんて。510
 大丈夫、やって行けるわ。だって、ことわざにもあるわ、
 『去る恋あれば、来る恋あり』ってね。
 絶対、私は晴れ着を着るわ、
 そして陽気な五月に、もう一度若々しくなって
 そしてこの歌を歌うの、『こんな陽気な寡婦やもめはいなかった』をね。」515

「あの人は怒ってはいつも私たちを怖がらせたわ、
そして嫉妬の鋭い槍で傷つけた。
閨の方ではまるで役立たず。だって、
体質が冷・乾だったんですもの。

さあ、あの人がいなくなったんだから、ねえ、姉さん、
悲しむふりして喜ばなくちゃ、それが最良の薬よ。
生者は生者に、死者は死者にということね。」 520

するとパートックが言った。彼女は、さっきは本心を隠していたのだった。
彼女は、愛のない欲情に憑かれていた、
「そうよ、あんな人が20人いたって
私たちの^{のぞみ}性欲は満たされないわ。 525
こうして自由の身になれたんですもの、私はこの手に誓って
宣言するわ、一週間以内にきつと、
私の背中にもっと上手に爪を立ててくれる人を見つけます、ってね。」

するとコボックが、聖職者らしく自信たっぷりに言った。 530
「あれはまさしく天罰だったのですよ。
あの人はとても浮気で放蕩、
7人以上のお妾さんがいたのです。
ですが、善と悪の釣り合いを守る正義の神様の
堪忍袋の緒が切れて、厳しい罰を、 535
悔い改めることのない姦通の罪に与えられたのです。」

「あの人は傲慢で、平気で罪を犯しました。
そして神様の恩寵にも、怒りにも全く頓着なく、
権勢と力を伸ばすことに懸命でした。
そのような自分の罪があのような恥ずべき最期へと、 540
当然の死へと我が身を導いたのです。
それ故に、狐に喉をがぶりとやられたのは、

まさに神様のお裁きとしか言いようがありません。」

こう言い終わったとき、寡婦は正気づいて

立ち上がり、獵犬たちに叫んだ。

545

「そら、パーキー、ベリー、ベル、ボウジー、
ブルン、ライブ・ショー、リン・ウェイル、カーティス、
ナンティックライド、さあ、皆一緒に、文句言わずに、追いかけてくれ！
私の大事な雄鶏を助けておくれ、あれが殺されないうちに！
さもなきゃ、二度とここに帰ってくるんじゃないよ！」

550

それを聞いた犬たちは、一目散に駆け出した。

火打ち石の火花のように、野原を走り抜け、

疾風のように森を抜け、川を渡って行った。

そして、ロレンスの姿が見えるまで走り続けた。

ところで、狐は、獵犬が一列になって突進してくるのを見ると、

555

雄鶏に心の中で語りかけた、

「ああ、神様、お前と俺とが一緒に洞穴の中まで無事に行き着きますように。」

すると、雄鶏が、いくらかは気を取り戻し、狐に言った、

「私の言うとおりにすれば、絶対確実。

お前さんは腹ペコで、こんなに走って疲れてる。

560

力が尽きて、もうこれ以上逃げられないよ。

ここで振り向いて、言いなさい、

私と君は、向こう一年間友達だと。

そうすれば、あの連中は立ち止まり、もう追っては来ないよ。」

この狐は嘘つきのならず者で、

565

自分の言い分を守る手管に長けている。

しかし、驚くべき策略によって、見事に騙されたのだ。

というのは、嘘は最後には必ず敗れ去るからである。

狐はくるりと振り返ると、教えられた通りに叫んだ。

その瞬間、雄鶏は飛び上がって、枝にとまった。

570

さて、皆様、ロレンス君が嘲笑ったのは一体誰か、お分かりですね。

こうして、騙された狐は木の下で

^{ひざまず}跪いて、言った。「ああ、立派なチャンテクレールさん、

もう一度降りてきてくださいな。そうすれば私は何の報酬なしでも
一年間あなたの下僕になりましょう。」

575

「冗談じゃあない。人殺し、盗賊、盗人、行っちまえ。

首毛は血まみれ、襟毛も紫色にされてしまった。

これで私とお前は永遠におさらばだ。」

「お前の言うなりに目を閉じた私は馬鹿だった。

そのために、すんでの所でこの首を失うところだった。」

580

すると、狐が言った、「馬鹿だったのは私の方だ。

つつい口を開けてしまって、獲物を逃がしてしまった。」

「失せる、盗人、神様どうか、私がこいつの餌食になりませんように。」

そういい終わると、雄鶏は野原を越えて飛んで行き。

件の寡婦^{くだん}の屋根裏窓に止まったのです。

585

教訓

さて、やんごとなき皆様方、これは寓話であって、
比喩の譬えで飾られている。

だが、皆様方は、架空の物語の衣の下に
本当に大事な教訓を見いだすでしょう。

目的にかなうように言い換えれば、この雄鶏は、

590

家柄と血筋についてむやみに自慢したがる

愚かで高慢ちきな男たちのことです。

増長した高慢なんか糞食らえ！お前は毒の塊だ。
お前をひいきにするものは必ず滅びる。
お前には真の力がない。お前の足元はぐらぐらだ。 595
地獄の悪魔たちが良い証拠、

奴らは天上の大広間から追い出されて、
地獄の穴蔵へ、あの、身の毛もよだつ住処すみかに追い落とされた。
それというのは、奴らが高慢で、傲岸不遜の輩だからだ。
この嘘つき狐は、ほんとうに、甘言と、 600
響きの良い嘘の誘いと、毒を含んだ心とで、
媚びを売り、人を欺くことを喜びとする
おべっか使いを象徴している。
高潔な人物ならば、そのような者たちを軽蔑して当然。
というのは、何の考慮もなく、噂を信じてしまうことほど 605
危険な災いは他にないからだ。

邪悪な心と卑屈な追従は、一見甘い砂糖に似ているが、
その本質を知る者には、
胆汁のように苦く、猛毒に満ちたものとわかる。
さて、手短かに結論を申し上げるならば、 610
追従と自惚れ、この二つの罪は、
毒に満ち満ちている。皆様方は、
どうぞこれらのものから逃れられますように！